

桜船会 だより

第 42 号

発行日 2019.5.26

発行者 桜船会

発行責任者 木村允紀

三菱電機大船地区定年退職者の会



▲春の行事「アサヒビール神奈川工場見学&ビール園で昼食」での集合写真

会社側事務局からのご挨拶：桜船会の皆様へ
いきいきライフ：北海道胆振東部地震に遭遇
いきいきライフ：若き日の「あれ・これ」
いきいきライフ：ベンチャー企業との出会い
いきいきライフ：見たぞ！伝説の役満「九蓮宝燈」
いきいきライフ：徒然なるまま、大船の思い出
行事報告：春の行事報告
事務局だより・編集後記

情報総研 総務部長 岡本伸郎
矢田雅敏
足立吉弘
上原武雄
山崎広義
森本幸博
編集班
事務局・編集班

平成 30 年より情報技術総合研究所にて総務部長をしております岡本と申します。一昨年、桜船会創立 25 周年を迎えられたとのことですが、このように長く会が発展されたのも、木村会長様を中心とした会員の皆様の結束と運営に対するご努力の賜物であると敬意を表するとともに感謝申し上げます。



はじめに少しだけ自己紹介をさせていただきます。私は平成元年入社で半導体事業本部の北伊丹製作所(当時)に配属になりました。平成 10 年(31 歳)にブラウン管工場だった長野工場の雇用先として設立した半導体関係会社に出向、平成 15 年(36 歳)に日立、三菱電機の半導体事業を独立・統合して設立したルネサステクノロジ(当時)へ転籍し、平成 30 年(51 歳)に三菱電機に再転籍の上、情報総研勤務、同年 4 月より総務部長を拝命し、現在に至っております。

このように会社生活のほとんどを半導体事業の人事・総務業務に従事してまいりましたので、人事・総務屋としての経歴という意味では少し変わっているかも知れませんが、変化の激しい事業において、厳しい施策も多々ございましたが、他社、社外との関わり等も含め様々な経験をさせていただきました。

私と OB 会との関わりは情報総研に赴任するまではほとんどありませんでした。北伊丹時代、OB 会自体は存在しておりましたが、会員も小規模で活動も活発なものではありませんでした。ルネサスでは設立経緯等から OB 会そのものがございませんでした。そんな中、昨年 5 月 27 日に開催された第 26 回桜船会総会に初めて出席させていただきました。まず初めに受付で目に飛び込んできたのは、展示されていた写真、パソコン画、陶芸品、木彫り彫刻等の作品の数々でしたが、その出来栄のすばらしさや味わい深さに感動を覚えました。そして、総会の中で会員数と総会にご出席された人数をお聞きし、その規模感にも驚きました。また、活動に関しても、総会、春・秋の懇親会、親睦バス旅行、屋外行事、同好会活動

(ハイキング同好会、デジカメ同好会)、等非常に多岐に亘って活動をされており、会報やホームページを拝見すると、その一つ一つの活動が熱意と活気に満ちていると強く感じました。これも会員の皆様が会社をご退職された後も人と人の繋がりや仲間を大事にされ、生きがいや豊かな趣味を持って充実した人生(=いきいきライフ)を送っていらっしゃるからだと思います。経営学者のピーター・F・ドラッカーは「企業は<収益>から計画が始まる。非営利な組織は<使命>から計画が始まる」と言っています。ロボット教室のシニア講師、野球審判員等の記事を読ませていただきましたが、地域や世代を超えたこのような活動はまさに使命感のような強い意志を感じます。我々は諸先輩方の現役時代、定年後の生きざまから、今、我々にとって大切なものは何かということを学ばせていただいているのだと思います。

私が初めてこの情報総研地区にきた時の第一印象は三菱電機を支えているという「誇り」と「気概」を強く持った拠点であると同時に社会や地域との繋がりを大切にしている拠点いうことでした。美しく整然とした桜並木、働きやすい職場環境(事務所、実験室、リラックスできるオープンスペース、託児所等)そこで自由闊達に働く方々等々。今、このような環境下で安心して研究開発等仕事に従事できるのも、先輩諸氏である OB 会の皆様のおかげであると思います。今後も OB 会の皆様に誇りを感じていただけるよう、皆様が残していただいた財産を大切に、そして、それを発展させて、次の世代へバトンタッチできるよう、努力していく所存でございます。

最後になりましたが、今後も我々現役を指導していただくことをお願いするとともに、会員皆様のご健康とご多幸及び桜船会の益々の発展を祈念申し上げます。私の挨拶とさせていただきます。



「地震？」という妻の声に起こされたのは、広いベッドの中だった。ただならぬ揺れが収まるのに何分かかったのだろうか？ここが北海道函館ロイヤルホテルの最上階 8 階と意識するのに、さらに数分かかったと思う。しばらくすると停電！真っ暗になる。ホテルの中は異常に静かだった。スマホの明るさで、3時8分と知る。この辺は震度 5 の地震だったらしい。時々余震らしい揺れに驚く。寝られず、ひたすら夜明けを待った。カーテンを開けると、街はひっそり、函館の海も波静かだった。



当日の北海道新聞

とりあえず出掛ける支度をして、朝食のため食堂に向う。臨時の照明と手すりを頼りに、8階分の階段を降りるのは容易ではない。ましてや妻は5月の半ばに「左変形膝関節症」を患い、杖を突き突き歩行する状況であり、階段の下りを最も恐れていた。

やっとの思いで食堂に着く。停電で温かいものは一切なし。バイキング料理も、全て冷たいまま。コーヒーまでパック入りのアイスコーヒーのみで何とも味気なし。トイレは停電で、懐中電灯持参で用足しする始末。まいったまいった。

ホテルからタクシーに乗り、街に出る。信号機が点いていないので、運転手は恐る恐るの運転だ。ガソリンを求めてスタンド周辺は長蛇の車列だ。

匂の味、函館朝市も、まったく活気無し。人影もまばらだ。バスも全面運休。もちろん函館名物市電も走っていない。対照的に JR の駅は、いつ走るのか分からぬ列車を待つ人で、溢れていた。

ホテルに帰るのもタクシーに頼るしかなし。途中



点滅しない交通信号

テレビは激震報道のみ。地震の怖さを知る。家族との連絡はスマホで、LINE のやり方を覚えたばかりだったので、退屈しのぎで助かった。

旅行3日目は、予定をすべて変更。また苦勞して非常階段を降りる。しかも荷物を全部持って。朝食は例によって冷たいものばかり。食欲はわいてこない。

空港周辺の被害は少ないようなので、取りあえず空港に行った。帰りの飛行機の無事を確認し、ひたすら待つことにした。スマホの充電場所は、大混雑だ。

食堂も水物はなくて、函館名物「あっさり塩ラーメン」も食べそこなった。

元々今回の旅行は、妻の卒寿記念で、3回目のハワイ旅行を狙っていたが、脚が思わしくなく函館に変更したものだった。八幡坂からの函館湾を一望できるロケーション。山頂から見える夜景。イカ釣りの漁火がわずか1~2灯しか見えない。かつて自分が営業担当だった頃の勢いがなく、誠に寂しい限りであった。

それにしても「北海道胆振東部地震」で、大規模な土砂崩れが発生し、住宅が巻き込まれ、死者が出た。改めて謹んでご冥福をお祈りします。

幸いなことに、我々は無傷です。感謝。感謝。

昭和 30 年以降、昭和 52 年頃までの特許部員は入社時から特許部に配属され、そこで育成されるという、まさに生え抜きの人ばかりであった。いわば他部門との人事交流が全くない集団で、よくいえば特許のプロ集団ということになる。逆の見方をすれば、恵まれた温室育ちというか、箱入りの体質ということになる。



ところが、鎌電所長から特許部長に赴任してきた平岡敏也氏は、就任後しばらくして、特許部のそういう体質を危惧してか、本社特許部員と製作所・研究所の特許専任者との人事ローテーションを打ち出した。

私は当時 35 歳で小学 2 年の長男、幼稚園年長の次男、3 歳の長女と妻との 5 人家族でしたが、何の思慮もなく名古屋製作所への転勤を名乗り出てしまい、東京地区特許部の中の一番バッターとして 4 月 16 日付で転勤辞令を拝した。その後移転までの間に、多くの方が名古屋は大変な地だよ、デパートの営業マンの中では、ここで真面目に成果が出せたら日本中どこでも大成功するという話があるとか、この地に住み始めたら、まず人付き合いの難しさにも泣くよ、とかも言われた。それらがアドバイスなのか、励ましなのか分かつともせず、用意された戸建ての借り上げ社宅（玄関に入ると尾張旭市、外に出ると名古屋市守山区）に住み着いた。確かに、泣くことも辛いことも味わったが。

赴任して一年近くが過ぎた頃だと思う。

寒い日の名古屋駅地下鉄の階段で、楽しそうに階段の手摺を、こすりながら上がってくる幼い姉妹に出会った。何をしているのかと様子を見てみると、階段下から高齢の女性が手すりを頼りに、ゆっくりと上がってきた。「ばーば、大丈夫、冷たくない」と、その姉妹が声を発した。姉妹は祖母のために冷えた手摺を温めていたのだと、私は気づいた。幼い姉妹が手摺をこすったところで、手摺の冷たさは変わらないだろうが、孫たちの気遣いが嬉しかったのだろう。祖母は笑顔を絶やさず喜んでいた。

名古屋の地に住み着いて、驚いたことが他にもある。その一つ二つを思い起こすと、まず最初に、もの凄いコーヒー好きだということ。誰もが日に 10 杯位はかるく飲むという。そして、家の周りには（半径 300 メートル位の範囲）喫茶店が数十軒もあるのに、喫茶店が最も繁栄する時代だったのだろうか、未だ次々に新店舗がオープンするのであった。新店舗オープン情報を得ると、その店舗の前には開店前なのに既に長蛇の列が出来ている状況を目の当たりにしたときには、呆れるばかりの思いがした。

次の驚きも、同じくコーヒーに纏わることです。生活も落ち着きを取り戻し、ご近所さんとのお付き合いも、当初の心配は薄れ順調に楽しく進められていた日々の中でのことです（当然のことながら仕事の方も順調にはかどっていました）。

ある日、用件があつてご近所にお伺いした時のことです。家内と午前中にお伺いしたら、愛想よく応対があつたものの、しばらくお待ちください、とのことでした。すると、奥様が身なりを整えて外に出てきて、すたすたと歩きだし、行き着いたところが何と近くの喫茶店ではないですか。すすめられるままに着席して、家内ともども「ぼおっと」していると、ご用件は何でしょうか。と問われ、実はと会話を始めたのですが、その途中でモーニングサービス付のコーヒーが出てきたのです。それからというもの何処の家にお伺いしても、同じような対応をされるので、不審がっていると、この辺はこれが普通なのですよと言われ、本当に驚いた次第です。

名古屋の地での生活は、三年余りという比較的短い期間ではあつたが、住み着いてやがて親しくなると、周囲の温かな心遣いや人情の深さに驚き、また泣くことになる。

そして、元の場所（本社特許部）に戻り移ることになったときには、多くの先輩・同僚や、ご近所の人達に、なぜ戻るの？此処に住みついたら？と引き留められ、大変お世話になった恩を感じ覚えて、離れたくないと、また泣くことになった。

つまり、三度泣くことになったが、心の交流が深まるほどに、涙の意味が変わることを味わい、教つた「若き日のあれ・これ」でした。

私の生活は正月が明けると最初の仕事がチェンソーを持って山に行き、シイタケの原木と風呂焚きの薪の切り出しから始まる。



次に夏野菜の苗場作りで、30℃前後で調整する。2月に入ってナス、ピーマン等の播種、ジャガイモの植付け、4月中苗を育て5月に入って定植し、6月はタマネギ、ジャガイモの収穫と長ネギの植付けを行い、8月は冬物のブロッコリー、白菜、ニンジン等の種を順番に育苗し、9月に定植する。またサツマイモ、里芋、しょうが等の収穫を行う。11月にはタマネギの植付けをする。これらの栽培には無農薬完全有機(米糠のボカシ、イカ魚粕を主成分の発酵肥料、馬糞を発酵したもの等)肥料を使っている。これらの野菜を週2~6日スーパーに出荷しているがお客様の評判は最高で、食味の全国大会にも出品した。

定年1年前にスーパーの店員さんにこれを使っておいしい野菜を作って、と言われたのが1枚のパンフレット。これがベンチャー企業との出会いであり、スーパーER、250CC、3,000円の土壌改良剤であった。一番の影響を受けたのがベンチャー企業代表の石井威氏(以下石井さん)である。スイカの連作障害を防ぐERの開発者でもある。この企業は健康関連製品の開発と販売、生活習慣病の改善法の実践指導を行っている。月1回JTBの研修センターで健康に係わる研修会を開催し、1泊2日24,000円で、毎回140人前後の人が全国から集まり勉強している。

私は石井さんが話すことが余りにも大きな問題であるのでついつい引き込まれていった。日本の医療費は窓口負担が1割から3割、そして保険料、さらに税金(公費)から成り立っている。この公費が全体の34%で医療費が毎年1兆円余り増え続けて厚労省の推計では2025年度には72兆円になると予想されている。国の借金が1,000兆円余りで、このまま進めば日本の医療制度は壊れてしまう。医療費の7割が使われている生活習慣病を直すには生活習慣を改善しなくてはならない。この点は石井さんが大きな

声で言われたことである。普通の人はこんなに大きな問題なのに他人事のように思っている。もっと関心を持ってもらいたいと思う。

石井さんが言われることは「生活習慣病は自己責任の健康管理で防止を!」である。健康な体になるには体温を上げ、血流を良くすることで自己免疫力を上げ中庸に持っていくことが大切で、そのためにはどうするかという事を色々学んだ。

現在は薬事法、医師法、健康増進法等の関連で、もし素人が他人に効果がある、治る、良く効く等と言うと罰せられることになる。余談になりますが体温が1℃下がると自己免疫力は50%下がるそうです。血液の粘度も上り、流れが悪くなり、心臓や脳にダメージを与えることになる。体の毛細血管の太さは3ミクロンで、2.5PPMのごみは血管の中に入っています。ちなみに人間の血管を1本につなぐと長さは10万キロメートルになるそうです。いかに体温が重要であるか再認識する必要がある。

石井さんが開発したスーパーERについては6年前に全国スーパーER研究会連合会が発足し、私が初代会長に就任し、静岡や長野に何度も足を運んだ。

人の体は食べ物でできているという事を教えてくれた星名聖剛ドクターを顧問に、事務局を企業の中に置いてもらった。主な活動はビックサイトの1月の健康博覧会、8月のアグリフードEXPへの出店、全国へERを広める活動、企業が行うドクターの講演会の動員、会員相互の情報交換、各グループの園地見学等を行っている。

その他の活動としては、研修会で出会ったドクター達とのミーティングがあり、大変興味深く、勉強になるもので、私にとって貴重な場である。

最後に平成31年最後の研修会が3月21日湘中央学園という医療関係の専門学校で行われた。そこでの最後の講師である、元国立がんセンターの外科医長だった島村ドクターが挨拶で言った言葉が印象的で、「今まで何千人も手術して治したつもりが、ただ切ただけで治っていなかったんだ」と言われたことが今でも忘れられない。

1959年に横浜駅「裏口」と呼ばれていた西口に高島屋がオープンし、その数年後にはダイヤモンド地下街も出来て横



浜一番の繁華街に成長する過程で横浜駅西口に大きな喫茶店が次々に開店したことを覚えています。

同様に雀荘も1960年代には繁華街や学生街に増えました。マージャン(麻雀)は、戦時中は衰退しましたがリーチ、ドラなどの新ルールとともに1960年代から再度盛んになり、これを昭和初期の隆盛に対して第二次麻雀ブームと呼ぶそうです。

当時、直木賞作家の色川武大氏が週刊誌に連載した「麻雀放浪記」が大人気となり、この連載のペンネームは阿佐田哲也〔朝だ、徹夜!〕でした。同じ頃に日本テレビの「11PM」が大橋巨泉氏の解説で麻雀対局を放映し対局にプロ雀士の小島武夫氏が出演するなど盛り上げ、さらに麻雀専門誌が発行されて麻雀の劇画がコミック誌に掲載されたりもしました。

私が麻雀の基本ルールを覚えたのは高校生の時です。高校を卒業して実践の機会が得られるようになると夢中になり、寝ても目をつぶると麻雀牌がちらつくような時期がありました。どうしたら麻雀がもっと強くなれるかと、剣豪小説作家でもある五味康祐氏の麻雀教本や小島武夫プロの麻雀戦術書などを読み漁ったりしました。麻雀の勝敗は運(ツキ)と技術的要素で支配されますが、さらにその人の性格も対局に表れ、そこも面白いところです。麻雀ルールは、細部運用や追加ルールについて対局者間で取り決めが必要です。新しく対局する人とは対局前にルールの取り決めをする面倒さがありますが、普段の仲間との対局だけでなく他流試合をすると独特の緊張感が味わえました。楽しかった麻雀ですが私は諸事情から40歳過ぎには止めました。ところが同窓会がきっかけで高校時代の級友と20数年ぶりに麻雀を再開することになりました。この場で大変珍しい麻雀の上がりを見ることが出来たのです。

麻雀の上がりには「役」というものがなくて、役の中で出来上がる確率の低い(難度が高い)特別な役を

「役満」と呼んでいます。役満にも何種類かありますが、良く知られた役満で「国士無双」と称されるものがあり、これの出来る確率は約2000回に1回と言われており、毎週1回麻雀卓を囲んでいても年に1~2回メンバーの誰かが出来るぐらいのもので

掲載の写真は「九蓮宝燈(チューレンポウトウ)」と称される非常に珍しく、かつ難度の高い役満を仲間が上がった時に撮影したものです。1種類の牌だけで手持ちの13枚を揃え、かつ1と9が3枚ずつとその他の2~8までは1枚



ずつ手中にある状態でした。ここに写真右端の牌を持ってきたので上がりです。この状態は1~9のどの牌を持ってきても、或いは卓を囲んでいる誰かが出しても上がりです。「九蓮宝燈」は「国士無双」に比べ確率的に100倍も難度が高い珍しい手です。この写真のようにどの牌が来ても上される真の9面待ちになる事はさらに珍しいことです。普通に麻雀を続けていても50年いや100年に1度見ることが出来るかどうかの超レアな役満と言えます。

ところが2014年に麻雀を再開したとたんに卓を囲んだ友人がまさにこの手で上がりました。あまりの難度の高さからこの役満を上がると「全ての好運を使い果たしてしまうので長生きできない」という都市伝説まであります。幸いな事に「九蓮宝燈」を上がった私の友人は5年経過したが元気に麻雀を続けています。

麻雀は捨てられた牌などを手掛かりに相手の手を推理して進めるゲームでもあり勝利の快感だけでなく読みが的中した時の醍醐味も堪能できる面白さがあります。私が昔の級友と打っている雀荘は昼間禁煙なので既にタバコを止めた私にピッタリで、これからも健康マージャンを楽しみます。

昨年に、念願の「桜船会」入会が叶い、OB会に参加し、懐かしい顔、顔……。嬉しさの余り、寄稿を了解したことを後悔するも、ご挨拶代わりに、自己紹介も兼ねて、大船の思い出を徒然なるままに書かせていただきます。



■ 甲子園で生を受ける

昭和(本誌が発行の時には、2代前になっているんですね)30年に、西宮市甲子園町(甲子園球場から徒歩1分)の産婦人科病院(現存)で生を受け、甲子園浦風町の実家(甲子園球場から徒歩7分)で25年間(甲子園球場から徒歩1分の甲子園高潮町にあった高校への通学を含む)過ごしたのち、三菱電機就職とともに、湘南の地にやってきました。

「三つ子の魂」よろしく、関西弁はいつまで経っても抜けず、阪神ファンであることには変わりなく、高校野球では、縁がなくとも、関西の高校を応援してしまうありさまです。

■ 鎌電地区で社会人としての生を受ける

昭和56年に入社しましたが、その年の7月に設立された「情電研(情報総研の前身)」の「一期生」となります。当時の「情電研」は鎌電地区にありましたので、鎌電地区で会社人としての生を受けたこととなります。

■ 大船地区での情景

昭和60年の「情電研」の「大船地区移設」に伴い、大船地区に移って以来、本社異動までの約15年間、大船地区で育てて頂きました。

その10年強が過ぎ、三菱電機は卒業したものの、MIND社に引続き職を得ながらも大船地区での「情景」を数多く思い浮かべている昨今です。

- ・研修生のころ、船電見学に来た際に、今は無い船電本館の3階から同期の船電研修生から手を振ってもらったこと。研修生時代に多くの地区に見学に行きましたが、このような歓待を受けたのは、大船地区だけです。みんなどうしているかなあ!

- ・移転直前に、完成した第一研究棟へ下見に来ました。まだ、什器などが入ってなく、広々としたフロアに、某先輩が「室内テニポンができる」と言ったことはいまだに笑えます。当時の「情電研」は、鎌電内外をたらい回し状態だっただけに。

- ・(当時)近代的な第二研究棟ができた時に、感激したのを思い出します。特に、大会議室の大きさには圧倒されました。その大会議室を埋めた大勢の会社表彰受賞者に混じって、所長表彰を頂いたのは、うれしい思い出の一つです。防衛庁向け光学部品開発で下名一人の単独受賞だったので、感慨もひとしおでした。三菱電機にとって、特異なテーマで下名が一人だけで単独で開発に携わっていただけに。

- ・なんとと言っても「桜」でしょう!大船地区移転前々年だったと思いますが、メイン通路いっばいに枝を伸ばしていた桜が満開になり、時間外を終え帰宅しようとしていた際にライトアップされた「桜花」のトンネルに、まさに「幻想」を感じたことを憶えています。あれ以上の桜はまだ見たことがありません。

- ・桜まつりにはいつも家族で来ていました。「花より団子」の子供たちは、お弁当が終わると、桜を愛でることなく、貯水槽の脇のちょっとした土手(高さ1mもなかったと記憶するが)で、どこかで見つけていた段ボール箱をソリにして、キャッキョッと大はしゃぎでした。そんな長男も今春、昨春の次男に続き、結婚しました。末っ子(長女)は、全くの気配なしですが。

■ 大船地区ふるさと

ご依頼を受け、徒然なるままに思い出す大船地区での「情景」を書き綴ってきたのですが、筆が止まらない自分を発見!人生でのふるさとは、「三つ子の魂」よろしく、関西(甲子園)ですが、社会人としてのふるさとは、その生を受けた鎌電地区ではなく、大船地区であることを発見!

そのふるさとの「桜船会」に入会できました。今後とも、よろしくお祈りします。

- 1) 行 先 : アサヒビール神奈川工場見学&ビール園
で昼食
- 2) 実施日 : 平成 31 年 3 月 29 日(金)
- 3) コース : 伊豆箱根鉄道・大雄山駅 10 時集合～
(徒歩 50 分/2.5 km)～「アサヒビール神
奈川工場」(11:30～12:50 見学・試飲)
～敷地内ビール園で昼食(13:00～
14:00)～解散
- 4) 参加者 : 30 名 (内ご家族 2 名)
- 5) 天 候 : やや花冷えの曇天

家を出る前の予想とは違い、思ったよりも肌寒い中、集合場所の大雄山駅を 10 時 5 分に出発。途中路傍に咲く満開の枝垂れ桜やボケの花等を楽しみながら



えていた。

工場見学は 11 時半から始まったが案内嬢のスキルの高い説明で分かり易かった。見学の最後に用意されていたビールの試飲ではアルコール度がそれぞれ 5%、5.5%、6.5%のドライ、ドライブラック、ドライプレミアムの 3 種類をグラス 3 杯まで試飲できたが、これが実に美味しかった。特に朝からこの時のために水分補給を意識的にセーブしていた事もあり、



普段家で飲むビールとは全く違う味で 20 分間の時間制限内にあっという間に飲み終え、ほろ酔い状態になった。その後、ビール園に移り昼食をとったがメニューは「山形三元豚の炙り重ランチ」で、これもトロトロの肉が実に美味で空腹だったこともあり、十分満足できる味と量を堪能した。

今回工場見学を通じて驚いたのは、これだけ大きな工場をいくら自動化が進んでいるとは言え、総勢

80 名の人員で運営していることである。またアサヒビールの傘下に朝ドラ「マッサン」で有名になったニッカウイスキーが入っていること、アーリータイムズやジャックダニエル等の輸入ウイスキーも扱っていることなど、普段消費面でお酒に少なからず興味を持つ自分にとって新たな知見を得た思いがする。

工場で解散式を行った後、試飲した美味しいビールの余韻を楽しみながらほろ酔い気分で帰路についた。参加された皆様お疲れ様でした。最後にこの日歩いた歩数は約 1 万 2 千歩。良いウオーキングの機会を得ました。

事務局

会員動向 (H30.10.1～H31.4.20)

■会員動向 (敬称略)

- ・会員数 : 220 名
- ・入会者 : 1 名 田口 彰一
- ・退会者 : 5 名
菅井 克男 松井
長谷川 純司 松島 勇作
吉田 茂正
- ・物故会員 : 3 名
井上 浅次郎 祖父江 晴秋
清水 正次

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

■編集後記

本誌 42 号の編集作業中に新天皇即位による元号の切替えが行われ「平成」から「令和」の時代に変わりました。「平成」は、会員の皆様が会社でバリバリの現役として活躍された後、定年退職して第二の人生を歩み始められた方々が大半で、それぞれの人の想いが沢山詰まった時代であったと考えます。

新たな「令和」の時代が平和で明るい時代であることを望み、我々 OB が「令和」に生きる現役の人達に役立つ有益な何かを残せれば幸せだなと思います。

編集責任者 : 桜井貫智

編集委員 : 馬場景一 皆川良司

印刷所 : (株) さんこうどう